



「常西合口用水」が富山県初の 世界かんがい施設遺産に認定・登録！

1 世界かんがい施設遺産への登録

2020年12月8日、富山市に位置する「常西合口用水」が富山県では初の「世界かんがい施設遺産」に認定・登録されました。

世界かんがい施設遺産とは、かんがいの歴史・発展を明らかにし、理解醸成と施設の適切な保全に資するため、歴史的なかんがい施設をICID（国際かんがい排水委員会）が認定・登録する制度です。

現在、世界かんがい施設遺産に登録されている施設は世界で105施設あり、うち日本では42の施設が登録されています。



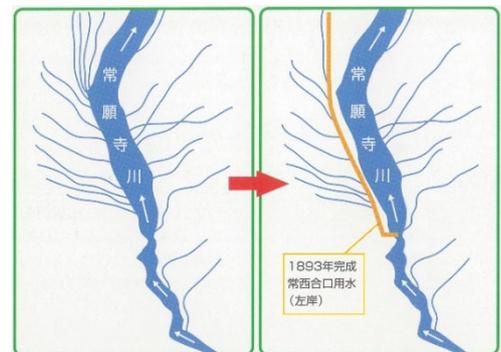
現在の常西合口用水

2 常西合口用水の役割・歴史

常西合口用水は、世界有数の急流河川である常願寺川の左岸を流れる用水で、約3,300haの農地を潤すとともに、上水道や工業用水、水力発電にも利用され、地域の発展を支える大切な農業用水です。

1891年、常願寺川の両岸には多数の取水口があり、特に流れの速い左岸側では、洪水の度に氾濫により甚大な被害が発生していたことから、オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケが、治水計画と合わせて、左岸にある12の用水の取水口を廃止し、上流の安全な箇所統合取水口を設置する「用水の合口化」を提唱し、翌年には工事に着手しました。

当時のかんがい面積は約5,000haにおよび全国でも初めてとなる大規模な合口事業でしたが、蓄積された災害時の記録等の活用や1万人以上の作業員を動員するなどして、わずか2年という短期間で1893年に完成させました。



合口化前後対比図

実は常願寺川の治水の歴史は古く、1580年に織田信長の命で越中入りした佐々成政が入国1年目に起こった大氾濫に際し、築いた石堤が始まりとされ、今でもその一部は「佐々堤」として用水路に残されています。また、赤煉瓦で構築され「新庄の赤門」と呼ばれて親しまれる排砂水門や、その後に整備された用水路沿いのプロムナードが、やすらぎのある水辺空間を地域住民に提供しています。



用水底に残る「佐々堤」の一部



新庄の赤門

参考URL

・ICIDのHP（農林水産省HP）：<https://www.maff.go.jp/j/nousin/kaigai/ICID/>